

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520050

研究課題名(和文) 写本に基づくバルトリハリの文章意味論の再検討

研究課題名(英文) Reexamination of Bhartrhari's Theory on Sentence and its Meaning, based upon the Manuscripts

研究代表者

赤松 明彦 (AKAMATSU AKIHIKO)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80159326

研究成果の概要(和文)：本研究は、古代インドの言語哲学者たちが「文の意味」についてどのように考えたかを諸サンスクリット文献の分析を通じて検討するものである。従来の仕事の成果を踏まえ、本研究では、インド6世紀の言語哲学者バルトリハリの主著『ヴァーキヤ・パディーヤ』の第2巻自註全体のテキスト分析を行うとともに、写本研究を行った。その成果として、バルトリハリの文章意味論は、全体論的な文脈において理解されるべきものであることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study investigates how linguistic philosophers in ancient India conceived of "Sentence Meaning" through an analysis of Sanskrit texts. Based on my past studies, in this study, I have analyzed the text of the "self-commentary" of the 2nd Chapter of the Vakyapadiya written by Bhartrhari, a linguistic philosopher in 6th Century India. And at the same time, I have tried to make a critically edited text by using XML mark-up while checking the manuscript. Consequently, I have reached the conclusion that Bhartrhari's theory on "Sentence Meaning" should be understood in a holistic context: the whole is not the sum of its parts, and it is only within the context of a sentence (whole) that a word (part) has its meaning.

交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 800,000   | 240,000 | 1,040,000 |
| 2008年度 | 600,000   | 180,000 | 780,000   |
| 2009年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2010年度 | 900,000   | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：インド哲学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：バルトリハリ、言語哲学、意味論、文と単語、サンスクリット文学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 文学派の意味論の研究は、申請者のほかに、広島大学の小川英世博士が、すぐれた研究を継続的に行っている。世界的には、Ashok Aklujkar 博士が第一人者である。申請者は、2003年10月から2004年3月末までの六ヶ月間、Aklujkar 博士を京都大学客員

教授として迎え、共同研究を行った。その際、Aklujkar 博士が所持していた『ヴァーキヤ・パディーヤ』第2巻自註の写本をはじめとする写本類の写真撮影を許され、それによって、この写真に基づくテキスト研究と校訂テキストの作成作業を開始するきっかけを与えられた。本研究は、このテキスト研究と写本

研究を本格的に実施するとともに、Akujkar 博士自身によって現在も行われている校訂テキスト作成の作業に結果的に協力することで、国際的な共同研究をも達成しようとするものでもあった。

(2) 同時に、本研究では、写本研究における新たな方法として、近年に大きく進展してきた人文学における XML 技術を利用するつもりであった。この XML 技術に関しては、TEI (Text Encoding Initiative) のグループが、多くの技術を公開し、最近では TEI P5 というテキストコード化の標準が提供され、すでに古典学や聖書学の分野でも、いくつもの成果が出されているが、申請者がこれを開始した頃は、まだまだ発展途上段階であった。マークアップのためのエディタなども各種開発され、またコード化のガイドラインなども各種提供されるなかで、それらを利用して、申請者は各種の試みを行った。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、申請者がこれまで行ってきたインド古典期の言語哲学研究成果を踏まえ、バルトリハリの文章意味論についてさらに深く検討を加えようとしたものである。最終的には、申請者が本領とする言語哲学的な観点から、正確なテキストに基づいて、バルトリハリの文章意味論を厳密にインド思想史の中に位置づけ、それを解明することを目的とした。

(2) 申請者は、バルトリハリ研究の世界的権威である Ashok Akujkar 博士から託された『ヴァーキヤ・パディーヤ』第二巻自注のマラヤラム写本の写真を持っている。本研究に先立って、写本については従来の写本研究の方法による予備的な研究を行ってきたものであったが、本研究では、XML 技術を用いての新たな写本研究の方法を開拓し、『ヴァーキヤ・パディーヤ』第二巻自注の全く新たなテキストを作成することによって、インド哲学研究の領域における本格的な XML 技術の活用と、それを用いたテキスト分析の可能性の追求も目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 写本研究：『ヴァーキヤ・パディーヤ』第二巻自注のテキストを写本に基づいて再検討するとともに、その校訂テキストを作成する。そして、それを XML 文書化して、各種の情報をマークアップして埋め込んだ電子版「テキスト研究ノート」を作成する。

(2) 従来の紙と筆記具による「テキスト研究ノート」には、あらゆる情報を書き込むことが可能であった。写本の形態や文字の特徴、

読みのローマ字転写、異本の指示、異読の可能性、文法事項、校訂情報、さらには、翻訳や注記、文意の分析、他のテキストへの言及、平行句の指示など、様々な情報を自由に書き込めたのである。しかし、テキスト分析にコンピュータを利用するようになって、これらの情報は、別々の作業（写本の画像化、校訂テキストのデジタル化、翻訳や注釈のファイル、また分析研究のファイル作成など）の中で、個別のファイルに書き込まれ、保存されることになった。そこでは、研究を有機的な連関の中で一体化したものとして遂行することが困難であった。しかし、近年の XML 技術は、単に WEB 上の文書表示技術にとどまるのではなく、人文学において、テキスト処理・分析の新たな方法を提供するものとなってきた。電子テキストの XML 文書化は、ちょうどわれわれがかつて「研究ノート」においてあらゆる情報を書き込むことによってなしていた一体的な研究作業を、コンピュータ上で可能にする技術であり、テキスト作成・分析の方法として極めて有効なものであると申請者は考え、このような意味での電子版「テキスト研究ノート」の作成を行った。

(3) テキスト研究：一方で、従来通りの詳細なテキスト読解研究を行うことによって、バルトリハリの「文の意味」論の特質を明らかにする作業も行った。

## 4. 研究成果

(1) 本研究が目指した成果は、一つには、写本に基づいた信頼できる校訂テキストを世界の学界に提供すること—これはインド学のような文献学に基礎を置く学問においては当然なされるべき基礎的な作業でもある—である。もう一つは、従来ともすれば神秘主義的あるいは形而上学的な性格が強調されてきたバルトリハリの思想を、言語学・言語哲学の一般的な枠組みの中に正確に位置づけ、あわせてインド思想史の流れの中でその特質を評価することであった。これに関連して、その大枠の構想を、2009年に京都で開催された第14回国際サンスクリット学会の期間中に世界の研究者との議論の中で発表した。高い評価を受けた。以下、成果に関して、さらに具体的に述べる。

(2) マラヤラム文字写本の写真を用いて、『ヴァーキヤ・パディーヤ』第二巻の本文および自注の新たな校訂テキストを完成することを目指し、おおよそのものを完成することができた。しかし、その全体を校訂版として広く公表できるような状態にはなっていない。最終的には、やはりすでに20年以上にわたってこの写本に基づく校訂テキスト作成にあたっている Akujkar 博士の手によ

ってその校訂テキストは発表されるべきものであると考えている。この研究期間中に、マヤラム文字写本の読解については、ウィーン大学の室屋安孝研究員（現在ライプチヒ大学）を招き、専門的な助言を得た。また、各種の写本の扱いについての知見を深めた。完全な校訂テキストの公表については今後のこととなるが、電子版「テキスト研究ノート」は、私家版として完成し、以下に述べるようなテキスト分析・読解研究に使用した。

(3) テキストの読解研究を進めることによって、バルトリハリの文章意味論の特質についての検討を完了した。これについては、「単語の意味と文の意味をめぐる議論 (VP II. 44 の周辺)」として論文にまとめたところである。そこでは、『ヴァーキヤ・パディーヤ』第二巻の本文の写本、自註の写本、本文の出版テキスト、自註の出版テキスト、注釈のテキスト、本文の解釈、諸注釈が示す解釈、これらの各レベルでのテキスト解釈に関わる議論を、他学派の論者の主張や批判も参照しながら検討した。特に、単語の意味と文の意味をめぐる議論の箇所を中心に読解し検討した結果、写本の読み、出版本の読み、本文の理論的解釈について、インド言語哲学史上に新たな知見を提示することが出来た。以下にもう少し具体的にそこでの研究成果を示しておく。

① ここで取り上げたのは、直接的には、『ヴァーキヤ・パディーヤ』第二巻第四四詩節に対するブンヤラージャの注の本文の読みをめぐる問題である。現在の刊本である Iyer のもの（また、Raghunatha のもの）では、本文は、athAtra saMghAtapakSa eva prakArAntareNa+anvitAbhidhAnapradarzanAt padArtha eva vAkyArtha iti prakramayitum Aha となっている。（下線は申請者。下線部に注目）一方、Aklujkar 博士は、次の読みを提示している。athAtra saMghAtapakSa eva prakArAntareNa+abhihitAnvayapradarzanAt padArtha eva vAkyArtha iti prakramayitum Aha。文の意味と単語の意味の関係を示す理論として、anvitAbhidhAna 理論（単語が連結した上で一つの文意を表示すると考える理論）と、abhihitAnvaya（一つ一つの単語の意味が結合した上で文意が成立すると考える理論）とがあったことは、ミーマーンサー学派の文意論の展開の中ではよく知られているものであるが、バルトリハリ自身がこのような区別を立てたわけではない。ここでは、注釈者のブンヤラージャが、ミーマーンサー学派の理

論を借りて、バルトリハリの意図を説明しようとしているわけであるが、それを端的に示すはずのテキストの読みが、学者によって正反対の形で提示されることに、まず注意されなければならない。いったいどちらの読みが支持されるべきであるのか。申請者は、この問題を、テキストの読みの問題としてとらえるとともに、これを古代インドにおける「文章の意味」論の思想史的展開の中に位置づけることで、ふたつの読みが内包している言語論的な意味を検討した。

② ここでの問題は、「単語の意味がそのまま文の意味である」(padArtha eva vAkyArtha) という命題をめぐる問題と言い換えてよい。そこでまずこの問題の端緒とも言うべきミーマーンサー学派のシャバラの論述を取り上げる。そこでこの問題提起は次のようなものである。「文からは文の意味が理解される。文として想定できるのは、単語の集まり以外にはない。(n 個の単語からなる文がある場合、文の意味をもたらす n+1 個目の単語があることはない。したがって文=n 個の単語である。) しかし、n 個の単語があるだけでは文の意味は理解されない。」

③ ミーマーンサー学派は、「複数の単語の意味の集合が、そのまま文の意味である」と考える。一方、そこでの対論者は、「文の意味は、単語の意味 (の集合) とは別の存在である」と主張する。

④ シャバラの論述における結論は、「実に、それぞれの単語は、それぞれ自身自身の単語の意味を直接表示した後で、それぞれはその働きを停止したものとなる。さて今や現にその意味が理解されているそれぞれの単語の意味が、そのまま一つの文の意味を理解させる」となっている。つまり、「他ならぬ複数の単語から、単語の意味の理解がある。複数の単語の意味から、文の意味がある」ということであり、これが「単語の意味がそのまま文の意味である」という命題が表している事柄であるということになる。

⑤ ところで、ミーマーンサー学派の中で、anvitAbhidhAna 理論を立てたのは、プラバーカラであり、一方、abhihitAnvaya 説を唱えたのはクマーリラであった。しかし両者とも、その根拠にあるのは、上のシャバラの論述であった。したがって、

このシャバラの論述がどのような解釈を経て、両者の理論へと展開したのか、そのプロセスを明らかにする必要がある。それが明らかになれば、ここでのブンヤラージャの意図を明らかにすることができるかもしれない。

- ⑥ プラバーカラの『ブリハティー』の論述の検討を行った。
- ⑦ クマーリラの『シュローカヴァールティカ』の検討を行った。
- ⑧ 結論的に言えば、『ヴァーキヤ・パディーヤ』第2巻第四四詩節本文で述べられていることは、クマーリラの主張する abhihitAnvaya 説に近いと考えられる。一方、それに先行する第四一～四三詩節は、anvitAbhidhAna 説に近いものと言える。従って、テキストの読みとしては、Aklujkar 博士が提示しているものが正しいと考えられる。

(4) バルトリハリの文章意味論を、インド言語哲学史上に位置づける論考を成果として完成した。これについては、上記3)に示した論文の通りである。主として、ミーマーンサー学派の唱えた文章意味論との比較で、バルトリハリの文章意味論の特質を論じた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 赤松明彦、「パースペクティヴィズムにおける空華」、『インド論理学研究』第一巻、2010、pp. 41-58、査読無。
- ② AKAMATSU Akihiko、Anumana in Bhartrhari's Vakyapadiya, Logic in Earliest Classical India, edited by Brendan S. Gillon, (Paper of the 12<sup>th</sup> World Sanskrit Conference), 2010、pp. 183-190、査読有。
- ③ AKAMATSU Akihiko、Grammarian's philosophy in the history of Indian philosophy, ABSTRACTS of the 14<sup>th</sup> World Sanskrit Conference, 2009、p. 293、査読有。

[学会発表] (計2件)

- ① 赤松明彦、「パースペクティヴィズムにおける空華」、インド思想史学会、2009年12月26日、日本、京都、京都大学。
- ② AKAMATSU Akihiko、'Sky-flower' in Perspectivism、International

Conference, World view and theory in Indian philosophy, 2009年4月29日、スペイン、バルセロナ、カサ・アジア (スペイン外務国際協力省の公的コンソーシアム)。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

赤松 明彦 (AKAMATSU AKIHIKO)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80159326